

カンボジアという国と支援の考え方

名古屋大学教育学部附属高等学校 2年 Ria K.

きっかけ・目的

私の将来の夢は世界の医療格差をなくすため、全ての人が適切な医療を受けることができる持続可能な制度をつくることです。今回のスタディツアーでは貧困に対する持続可能な支援を実際に見て学びたいと思い、参加させていただきました。

スタディツアーでは日本大使館、UNESCO プノンペン事務所、リエンダイ寺子屋を訪問したり、ツールスレン博物館、アンコールワット遺跡などを見学したり、市内散策を実施したりしてカンボジアの理解を深めました。その中で学んだこと、印象に残ったこと、私が自分なりに考えたことを紹介したいと思います。

カンボジアの教育について

カンボジアは1975年から1979年までのクメール・ルージュによる教育制度の廃止や教師などの大虐殺により非識字率が60%を超えたという歴史があります。この影響は現在にも続いており、カンボジアは教員不足、教育の質の低さなど様々な課題を抱えています。

非識字者の親をもつ子どもは小さいころから文字に触れる機会が少なく、小学校に入っても周りの環境になじめず、中途退学してしまう場合が多いです。UNESCO や日本ユネスコ協会連盟では中途退学した子どもが学校外でも学ぶことができるように、また学校に戻ることができるように支援を行っています。



UNESCO プノンペン事務所で講義を受ける様子

子どもたちに夢を、大人たちに生きる術を与える寺子屋

日本ユネスコ協会連盟が行っている世界寺子屋運動とは、老若男女問わず全ての人への教育を目的とした運動で、アジアの発展途上国を中心に活動が行われています。カンボジアではシェムリアップ州の全 12 群に合計 22 軒の寺子屋があります。寺子屋では地域から選出されたボランティアからなる運営委員会を中心に、日本ユネスコ協会連盟の監督と支援のもとに活動を行っています。

授業は月曜日から土曜日の 7～11 時に行われています。ノートや筆記用具、制服などが無料で提供されるので、誰でも学ぶことができます。寺子屋をつくるにもいくつかの条件があります。第一に学びたい人がいるかどうか、寺子屋がほしいかどうかを村長に相談します。そして、十分な土地はあるか、安全かどうか、行きやすいかどうかなどを考慮したうえで、寺子屋の設置が決まります。寺子屋で考えるスキルを育てることで村の自治が向上し、豊かになっていきます。寺子屋では年代や状況に応じて多様な教育プログラムが提供されています。その中でも私たちが実際に見たクラスを中心に紹介したいと思います。

・復学支援プログラム（小学校）

小学校課程を 2 年間で修了できます。中学校への進学を目指します。



・中学校クラス（LSEP BEEP）

LSEP はオンライン、対面どちらの授業もあり、卒業後は普通科高校への進学を想定されています。

BEEP はコロナ禍で中途退学の子どもの増加から始まったプログラムで、オンライン授業を基本としています。卒業後は職業訓練校への進学を想定されています。

・栄養支援（給食）プログラム

村の子どもたちの健康面のことも考慮しています。子どもを寺子屋に行かせるよう親を説得するときに「無料で給食も食べられるから来てください」と言うこともあるそうです。

・識字クラス

読み書きができない大人のためのクラス。農作業が終わった夕方から夜までのクラスとなっています。

カンボジアは、もともと男尊女卑の思想が強く、学校に通うことができなかった女性もいます。文字や計算がわからないと、買い物をするときに紙幣がわからなかったり、値段の計算ができなかったりして、日常生活で不自由なことが多くなります。その上、子どもたちに絵本を読んであげたいのにできない、という葛藤もあります。本人たちいわく、目の見えないような生活だそうです。したがって、識字クラスには非識字者の女性が多く集まっていました。



・収入向上プログラム



村の大人たち向けに職業訓練、生活技術を提供して収入を向上させ、貧困のサイクルから脱する手助けをしています。

また、金利なしでのお金の貸し出しも行っています。例えば、さとうきびジュースを売る人に機械を購入したり借りたりできるように 200 ドルほどを貸します。そのお金は機械以外にも子どもの教育費などに充てることができます。その後、収益が出るようになったら、お金を金利無しで返してもらおう、という仕組みです。

教育プログラムの他にも、寺子屋は地域のイベントを開催するなど、公民館のように地域の人を繋げる役割も果たしています。

カンボジアでは地域によって教育などの現状がそれぞれ異なるため、地域に寄りそった支援がされています。

カンボジアの残虐な歴史と知らない日本人



犠牲者の遺骨が納められている塔



小さい子どもを殺すのに使われた木



遺骨の発掘

カンボジアでは、1975年～1979年までポル・ポト政権が台頭しました。この時代に政府が極端な農本主義的政策によるカンボジアの改革を行い、強制労働、虐殺、飢餓などで約200万人が命を落としました。

ツールスレン博物館はポル・ポト時代の収容所であり、かつての高校の校舎を使用したものです。収容者の身分によって入る棟が異なり、扱いに差がありました。多くの収容者はスパイ行為を疑われたりして強制的に連れられてきたのですが、濡れ衣を被せられた人も多数いました。

収容所の管理には幼い頃からポル・ポト政権の教育を受けていた少年兵が使われました。少年兵は幼いころから人を傷つけても殺しても何も感じないように育てられました。収容所での生活は過酷なものでした。寝そべるくらいのスペースしかない独房で音を立てることも許されず、食事は基本なく、週に1回水をかけられてその水を飲むだけ。そして毎

日のように行われる厳しい拷問。もとは小学校であった場所は遊具なども拷問の器具になり、完全なる地獄へと変貌しました。

個人的に、展示の中で一番印象に残ったのは収容者の顔写真です。恐怖や怒り、不安、絶望、笑顔などそれぞれ人によって表情が違いました。どの表情もばらばらなのですが、ポル・ポト政権が酷いものであった、ということを経験者の目を通して垣間見ることができたように感じました。

また、キリングフィールドは、多くの収容者がトラックで運ばれ、虐殺された場所です。その殺害の方法は残酷なもので、農具なども用いていたそうです。発掘現場からは頭部と胴体がばらばらになった遺骨が多くでてきたそうです。赤ん坊は無理矢理母親から引き離され、木に頭を打ちつけるようにして殺されていました。殺害した後は遺体をまとめて同じ場所に埋めていました。

私はカンボジアについて調べるまで、ポル・ポト時代について知りませんでした。実際にツールスレン博物館やキリングフィールドに行ってみて初めて、こんな残酷な歴史があったのか、と実感しました。私の周りの人にポル・ポトのことを話したりしましたが、ほとんどの人は聞いたことがない、と言っていました。戦後に起こったアジアでの出来事なのに、日本でポル・ポト時代について知っている人が少ないことはおかしいと思いました。二度とこのような歴史が繰り返されないようにもっと伝えていくべきだと思いました。

カンボジアの現地は魅力が沢山！



タランチュラ (上)

コオロギ (下)

日本にも昆虫食はありますが、私はカンボジアで初めて昆虫を食べました。はじめは抵抗がありましたが、思い切ってコオロギを口の中に押し込みました。すると、予想に反して、いかにも虫を食べているというような食感はなく、ただ揚げ物の味がしました。蜘蛛も口に入れてみると、なんと、チートスみたいな味がしました。カンボジアでは昆虫食を重要なタンパク質源としてよく食べるそうです。屋台では他にも幼虫やカナブンのような昆虫食も売っていて、興味はあったのですが、結局、勇気がなくて食べていません。

夕食時にはカンボジアの伝統舞踊を観ることもできました。美しい衣装でゆったりとしたダンスを踊っていました。伝統舞踊には王様のためのものと、民族舞踊が数種類あり、少しずつ違いま

した。民族舞踊の一つで、ココナッツを手にもって、他の人とぶつけることでリズムをとるものがあり、見ていて楽しかったです。



カンボジアではマーケットに行く機会も何回かありました。市場には沢山の店が並んでいて、色とりどりの花、服、靴、食べ物、アクセサリなどを売っていました。歩いている途中で店の人に手首を掴まれ、いかないで、と言われたり、おすすめの店を聞いたら家族経営にはまってしまったり…。日本にはないような光景が当たり前に目の前に広がっていて、面白かったです。



カンボジアの有名な世界遺産であるアンコールワットとアンコールトムに行ったときはその敷地の広さと建物の大きさに圧倒されました。日本では伝統的な建物は木材でつくられていますが、カンボジアの王朝時代のもは石が主な材料となっています。石の宮殿は、日本の建築物とは雰囲気が全く違って、重厚でしっかりとした一つの芸術の塊のように感じられ心が震えました。壁一面にはカンボジアの古くから伝わる物語にまつわる彫刻が施されており、どれだけの手間と時間がかかったのかを想像すると、感動しました。

宮殿の中で一番印象に残っているのは神々と悪魔の綱引きの壁の彫刻です。カンボジアでは綱引きは伝統的な競技で、壁に彫られている物語では神々と悪魔の戦争を綱引きによって決着をつけようとしているそうです。私達日本人からすると綱引きは運動会の競技というイメージが強いのでそれで戦争をすることは、思いませんでした。

カンボジアは、全体的に緑が豊かで、都会から出ると、目が安らぐ景色が延々と続いています。日本も自然豊かな国ですが、カンボジアとは全く植生が違うので、葉が大きい木の林を見ているのは新鮮でした。

カンボジアの宗教については、政権によってヒンドゥー教だったり仏教だったりした時代があり、建築物にはどちらの特徴もみえます。現在では人口の約 80%が仏教を信仰して

います。



壁の彫刻（神々と悪魔の綱引き）



アンコールワット



アンコールトム

医療の支援・拡充

私はカンボジアの医療の現状について知りたいと思っていたので、少しですが、カンボジアの人に聞いてみました。前々から小学校でも衛生教育は行われており、中学、高校になるにつれて発展的な内容を学ぶそうです。私たちが訪問した寺子屋の教室にも、手の洗い方のポスターが貼ってありました。また、街中には外国の支援で建てられた病院がいくつか見えました。シェムリアップで見た母子病院では無償で医療を受けることができるそうです。



手の洗い方のポスター

貧困 = 不幸せではない

寺子屋の訪問の後には、寺子屋の学習者の自宅を訪問させていただくことができました。学習者の自宅は、高床式のものでした。電気は通っていますが、水道は通っていないので、村の井戸から水を汲みます。野菜は基本自給自足で、肉を買ってきて炭で調理します。家に冷蔵庫はなく、扇風機も壊れてしまった、と話していました。しかし、バナナの葉で作った絨毯を売って稼いだお金で十分生活することができているといいます。

村の中には牛、豚、鶏など家畜を飼ったり、バナナやヤシの木、タロ芋を育てて活用したりしている家庭もありました。私が村で見た景色は、テレビのドキュメンタリーに出てきそうな貧困地域の村、というようなものであったと思うのですが、実際の印象は全くそうではありませんでした。そこで暮らしている人々はみんな仲がよく、笑顔で優しくて、何よりも楽しそうでした。そのせいか、本当は生活面で苦しいことがあり、貧しいということが気づきにくくなっていました。私は、テレビと現地で受ける印象との違いに衝撃を受けました。私たちが当たり前だと思っているものが揃っていない環境で生きている人々もその中で精一杯、自分の人生を生きていることに気づきました。しかし、おそらく、より富裕な生活を知り、比較しはじめると、その生活の中にある幸せは消えてしまうと思いました。

私は以前、日本のような生活水準が一番幸せに暮らせる、などということを考えていましたが、そうではなく、それぞれが自分の生活を他人と比較しないこと、実現しない欲を持たないことがありのままの本当の幸せなのかもしれない、と思うようになりました。





本当の支援とは、ともにつくるもの

今回のスタディツアーを通して自分の中で一番変化を感じたのは、支援についての考え方です。支援にも様々な形があります。いくつかの国は与えるだけの支援を行います。それとは逆に、日本はともに行う支援をします。どういうことかといいますと、例えば日本はカンボジアに埋まっていた地雷の撤去作業を行うと同時にカンボジアに除去する技術を教え、現地の人とともに活動していました。その結果、カンボジアは日本から学んだ地雷除去の技術を使って周辺国の支援をするようになりました。日本による現地の人とともに行う支援は、将来にも残るようなものであり、持続可能なものとなっています。また、UNESCOでは地域ごとの特徴を捉え、地域に合った形で環境保全などの事業を行っています。世界寺子屋運動でも、カンボジア最大の湖であるトンレサップ湖の水上集落にある寺子屋で、職業訓練として水草を使った工芸品の作り方を教えています。以前、私はカンボジアについて、国という大きなくくりでしか知ろうとしていませんでした。しかし、今回の研修で同じ国でも地域や環境によって人々が生きている世界は全く違うこともある、ということを感じました。そして、それぞれが求めている幸せの形に寄りそった支援を考えなければならないと思いました。

本当に必要とされている支援を考えるためには実際に現地に足を運び、現地の人と対話をする必要がある不可欠であると思いました。

これからに向けて

スタディツアーに行って仲間たちとともに様々なことを経験して多くの学びを得ることができました。やはり、違う国に行くと沢山の学べることもあり、世界を見る目が変わって心が広がったように感じます。日本とは全く違う環境・文化の世界を知ることによって彼らの世界から物事を捉える目を養うことができるのだと思います。海外に行って、観光だけでなく、現地の文化や歴史、課題にも目を向けて現地の人と関わる中で、知らなかった世界、視点に衝撃を受け、自分の見える世界を広げる体験ができると思います。

今回はカンボジアでの 8 日間だけでも多くの気づきを得ることができました。これからも世界中の国に行き、視野を広げ、広く国際的に活躍できる人になりたいです。

